

第 12 回市史講座ミニレポート：平成 27 年 3 月 21 日（土）

第一部「中世の寺院と神社」

講師：島根大学名誉教授 井上寛司先生



井上先生は中世の寺院と神社について中世の佐陀神社の事例をあげて「神仏習合」の内容や日本の宗教の歴史的特徴について述べられました。

佐太神社（松江市鹿島町）は、室町時代から現在と同じく3社殿の構造で、少なくとも3つの祭神を祭っていました。中世の神社には公的・国

家的な神社（王城鎮守・国鎮守）と荘園公領の鎮守（荘郷鎮守）と、民衆の素朴な信仰の対象であった零細な神社や小祠に分類でき、中世の佐陀神社は安楽寿院領荘園の佐陀荘の荘郷鎮守としての性格を有していました。

しかし、戦国期の15世紀末から16世紀初め頃を画期として、佐太神社の性格は大きく変化します。15世紀末に成立した縁起書では、イザナギ・イザナミとその御子神である（アマテラスとスサノオ）となり、佐陀御子神とその父母神から全国的で普遍的な祭神へ転換されたこと、また以前には独立した寺院であった真言宗成相寺が、佐陀神社の本寺として位置づけられるようになったことを指摘されました。

この佐陀神社の性格の転換について、荘園制の衰退と戦国大名尼子氏の宗教政策の関わりを取り上げられ、特に尼子氏の宗教政策を重視されました。尼子氏の宗教政策については杵築大社と鰐淵寺の関係が知られていますが、佐陀神社でも尼子経久の参詣を契機に仏教施設が建立されたと伝わること、成相寺の僧が佐陀神社の「社僧」として境内の経所に

参籠することになったこと、京都吉田家の作成した史料「延喜式裏文書」に佐陀神社が「出雲国二宮」として見えるようになったことを説明されました。

神社に関係する寺院として神宮寺の存在がありましたが、神社と一体的な関係を持った寺院（別当寺＝広義の神宮寺）もあり、佐陀神社では報恩寺・願力坊などがありました。また佐陀神社と杵築大社にしか確認できなかった寺院として、「本寺」という寺院もみられ、佐陀神社では成相寺が挙げられます。

このように「神仏習合」といっても様々な形態が見られますが、神社と寺院の関係が分かりづらくなった理由として、「神仏分離」と廃仏毀釈による史料の欠落、「神仏分離」の事例の希少さ、日本の宗教についての理解の不十分さを指摘されました。

最後に平成 27 年度発行の『松江市史』通史編「中世」について、中世のみに一冊を充てていること、宗教については神社史を含む寺院と神社の具体的な関わりについて取り上げていることなどを紹介いただきました。

第二部「松江地域の戦後史」

講師：佐賀大学文化教育学部准授 鬼嶋淳先生



鬼嶋先生は、昭和 30 年代の松江市域を、これまでのような敗戦→復興→高度経済成長という単線的な見方ではなく、住民の生活の変化に着目して、八雲地区と本庄地区の取り組みを元に述べられました。

はじめに、地域における社会教育と公民館の役割について説明されました。

て説明されました。

明治時代の優良村の流れを汲んだ八雲村では、「よい村をつくる」ために社会教育重視の「村作り」をしていました。その中で、公民館は、婦人会・青年層と協力して「正しい

生活の村つくる」ため、新生活運動を担当していました。

本庄地区での公民館は、地域振興の底力を産み出す場所であり、また、合併した松江市の出張所との関わりも深く、新しい町づくり、村づくりの中心機関としての役割がありました。生活改善と家庭の民主化をめざす新生活運動は、社会との矛盾、世代間関係により、停滞を見せます。

しかし、親世代の歩み寄りや、新しい教育を受けた子どもたちからの母親への指摘などにより、世代や性別を超えて、地域を良くしようという意識に変わっていきます。公民館結婚式に代表される、人間関係の民主化、衣食住の改善や赤ちゃん教室など、新しい活動の広がりには「民主主義の生活化」とも言えるとまとめられました。

[鬼島先生講座資料 1](#) [鬼島先生講座資料 2](#) [鬼島先生講座資料 3](#)